

**<実践報告> 社会 とのつながりに向けた支援の
必要性 : 「今ここにある『貧困』の現実パート1」
を終えて**

著者	阿部 潔
雑誌名	関西学院大学人権研究 = Kwansei Gakuin University journal of human rights studies
号	17
ページ	29-31
発行年	2013-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10236/10508

〈実践報告〉

〈社会〉とのつながりに向けた支援の必要性 —「今ここにある『貧困』の現実パート1」を終えて—

阿部 潔

2012年11月16日(金)に関西学院会館「風の間」において、人権教育研究室研究部会研究会プログラム「今ここにある『貧困』の現実パートI—若者を取り巻く現場から考える—」を開催した。以下では、当日の様子を概要すると同時に、三名のパネリストを招いてのシンポジウムを通じて明らかになった「若者ホームレス」への支援をめぐる課題について考える。

それぞれの現場での果敢な取り組み

『ビッグイシュー』日本代表の佐野章二氏からは、同誌刊行の際にNPOやNGOではなく有限会社＝社会的企業による試みとして「ホームレス問題」に取り組もうとした趣旨が説明された。そのうえで、創刊後、幾多の困難を乗り越えて通算200号を数えた現在までの『ビッグイシュー』の活動について報告が為された。その過程で、2008年のリーマンショック以後、若年層のホームレス（「若者ホームレス」）が急増していることが統計データを交えて指摘された。「若者ホームレス」の存在は、中高齢者からなる「おっちゃんホームレス」と比較して可視化されにくい。なぜなら彼らの多くは、路上でなくネットカフェなど24時間営業している商業施設で夜を明かしているからだ。だが、職を失い日々の寝る場所を欠いている点で、その生活実体はホームレスと変わりがない。佐野氏は、現時点で「若者ホームレス」の実数は多くないとしても、その背後にひ

きこもり／ニート／フリーターといった「ホームレス予備軍」の姿が見て取れることに注意を促した。そのうえで、近年増えてきている「若者ホームレス」とこれまでの「おっちゃんホームレス」とでは、「働くこと」に対する態度や気質に大きな違いがあると指摘する。厳しい就労経験を経てきたがために「働くこと」に誇りを持ちにくく、自らが置かれた窮状に対して「全部自分が悪い」と自己責任を内面化してしまいがちな「若者ホームレス」に対して、どのような就労支援を提供することができるのか。それこそが、ホームレス支援がこれから取り組むべき重要な課題である。過去9年間にわたる『ビッグイシュー』の取り組みの報告を通して、新たな課題が明らかにされた。

大阪府立西成高等学校で「反貧困学習」に取り組んできた肥下彰男氏からは、公立高校が地域における反貧困への取り組み拠点になることの必要性が指摘された。地域環境や家庭事情の面で厳しい状況に晒されている生徒たちのなかには、高校を中退してしまうものが少なくない。なんとかしてそれに歯止めをかけ、西成高校での「学び」による意識化とエンパワーメントを通して生徒各人に貧困に立ち向かう力を身につけさせることが、反貧困学習の目標である。具体的な事例を交えながら肥下氏が紹介された個々の生徒が置かれた厳しい状況は、決して「個人的なこと」と片付けられるものではない。今ここにある貧困は、社会的

な差別や排除の結果にほかならないからだ。貧困が連鎖する現在の日本社会のメカニズムをしっかりと見抜き、それを断ち切るための知識と技能を習得することが反貧困学習では目指される。高校を拠点としつつ、関係する各組織／団体との連携を通して「地域に根ざしたネットワーク」形成をすることがなによりも重要である。そう肥下氏は強調した。さまざまな差別が重層的に絡み合う「西成」という地域で暮らす／学ぶ生徒たちは、自分たちを取り巻く厳しい現実状況を知ることを通じて、その問題点を見抜き、異議を唱え、権利を主張する「活動する当事者」へと成長していく。「反貧困」の担い手である若者たちの逞しい姿が、肥下氏の報告を通して浮かび上がった。

NPO 法人 Homedoor 理事長の川口加奈氏は、自らの「ホームレスとの出会い」を交えて、どのような経緯と経験をへて大学生である自分がNPOを立ち上げ、大阪市が直面する「ホームレス問題」の解決に向けた取り組みを始めたのかについて話した。自分自身の内にもあった「ホームレスのおっちゃん」への偏見や差別の気持ちにしっかりと向き合ったうえで、そもそも「ホームレス問題」とは何なのか、それへの対応はいかにして可能かを考え続けてきた自らの経験を、川口氏は語った。そのうえで、ただ単に問題に対処するのではなく、そもそも「ホームレスを生み出さない」社会を実現することに向けた取り組みが必要だ、と川口氏は力説する。Homedoor が取り組む HUBchari と命名されたシェアサイクル・プロジェクトは、その理念に支えられた具体的事業にほかならない。シェアサイクル事業を通じて「働く場」を創出し、そこにホームレスのおっちゃんたちを取り込んでいく。自分の孫のような年齢のスタッフたちと関わりながらおっちゃんたちが張り切ってチャリの修理や整備に取り組む姿が、Homedoor の取り組みを紹介する川口氏の言葉から伝わってきた。

地元の行政や企業との積極的なコラボレーションを通じて「働く場」を提供する HUBchari の試みは同時に、社会や他者との関わりをホームレスの

おっちゃんたちに保証する仕組みでもある。とすると、ホームレスの人びとは孤立しがちだ。だが、働く場を得ることで、人びとは他者と関わり、己の自信を取り戻すことができる。その意味で「働くこと」はただ単にお金を得る手段ではなく、他人や社会と関わる場／契機でもある。各方面から注目され着実に成果を上げつつある Homedoor の HUBchari への取り組みは、そうした「働くこと」の社会的意義を浮かび上がらせる。ホームレス状態に陥ったおっちゃんたちに「自立ステップ」を提供する Homedoor は、大阪市が抱える「ホームレス」と「放置自転車」という二大問題を、関係機関・組織との協力のもとで一気に解決しようとする、今の若者ならではの発想に基づく斬新な取り組みである。

シンポジウムを通して見えた「若者」問題

三名それぞれの「現場」からの報告を通して見えてきたこと。それは「貧困」に立ち向かううえで、社会との「つながり」や他者との「きずな」が重要だという点である。一見すると「貧困」とは経済的な困窮状態に思われる。仕事を失い、収入が得られない。その結果、暮らしていくためのお金がなくなってしまう。そうした経済的な状況が、一般的に「貧困」という言葉でイメージされるものであろう。それは現実の一面を言い当てている。しかしながら、厳しい「貧困の現場」から見えてくるのは、必ずしも経済的な事柄に言い尽くせない、現代社会が抱える「貧困」の深刻さである。「仕事がない」という状況は、同時に他人や社会との関わりが限りなく希薄化する事態でもある。当然のことだが、どのような仕事であれ、それが社会において為されるかぎり、そこでは自分以外の他者との関わりが不可欠である。上司、同僚、顧客、取引先といった仕事をめぐる相手との関わりは、働く人びとにとって自分と社会との関わりを作り上げ、そこでの自分の意義や価値を実感する契機でもある。逆に言えば、そうした関わりを欠いたとき、必然的に私たちは自分が他者から切り離され、独りぼっちな孤立した存在になってしまったかのように感じざるを得ない。ここ

にこそ現代的な「貧困」の堪え難さが潜んでいるのだろう。「貧困」とは経済的であると同時に、極めて社会的なものである。だからこそ、貧困状態に苦しむホームレスの人びとへの支援に際して、いかにして失われた／分断されたつながりやきずなを取り戻すかが、「現場」における喫緊の課題として認識されてきたのだ。

『ビッグイシュー』やHomedoorの取り組みは、ホームレス状態にある当事者たちの経済的な自立支援を主たる目標に据えながらも、同時におっちゃんたちが一度は失われかけた社会とのつながりや他者との絆を取り戻すことをサポートしてきた。だからこそ、その社会的企業としてのプロジェクトは成功をおさめてきたのだろう。西成高校での「反貧困学習」においても、貧困の連鎖を断ち切るうえで仲間との連帯や地域社会との協同が必要不可欠であることを生徒たちにしっかりと伝えてきたことが、「社会性をもった自助グループの育成」の試みとして高く評価されるべきである。現代社会における「貧困」が経済的であると同時に社会的な問題であるならば、貧困状態から脱却するうえで就労支援とともに社会支援が不可欠である。そのことを、三つの現場から発せられた声は雄弁に語っていた。

ここで述べたような認識に立つとき、貧困問題が「若者」にまで広がりつつある昨今の状況を、私たちはどのように受け止めるべきなのだろうか。ただ単に、現代社会において仕事を失い経済的／社会的貧困に陥る人の数が、若者を含むかたちで増えただけなのだろうか。おそらく、事態はそれほど単純ではない。なぜなら、若年層が直面する社会的貧困には、それ独自の深刻さと困難が見て取れるからである。佐野氏はリーマンショック後のホームレス状況の変化に関連して「若者ホームレス」の増加に注意を促した。と同時に、「おっちゃんホームレス」と比較した際の彼らの脆弱さについて触れていた。仕事に誇りが持てず、今現在の困難な状況を自己責任と捉えがちな「若者ホームレス」にとって、おそらく「働くこと」自体が、おっちゃんたちのように「自

分を輝かせるもの」とは受け止められていない。なぜなら、戦後日本の高度経済成長期やバブル期を自分たちが担ってきたとの自負を曲がりなりにも持ち得る世代と違い、ポストバブルの「失われた10年」に成長を遂げた若者たちにとって、「働くこと」を介して社会とつながり、他者との絆を実感する経験は圧倒的に希薄だったろうから。つまり、ホームレス状態へと陥る「若者」の多くにとって、仕事＝働くことに金銭獲得以上の意義ややりがいを見出すことは容易でないのだ。彼らの多くが初等教育の段階から競争を強いられ、不景気のもと厳しい就職活動を強いられたであろうことを思えば、そのことは想像に難くない。そうであれば、佐野氏が警鐘を鳴らすように「予備軍」も含め今後増加することが危惧される「若者ホームレス」への具体的支援に際して、これまでの「おっちゃんホームレス」への対応とは異なる就労／社会支援が必要になるであろう。

「働くこと」が苦役でなく、社会参画を通じた各人の自信獲得になること。「仕事の間」が単に契約に基づく雇用関係に尽きるのでなく、より人間的な関わり契機に成りうること。それこそが、若年層のホームレスの自立を支援するうえで必要条件ではないだろうか。ホームレス状態に陥った人びとが周囲から「自立へのステップ」を提供されたとき、首尾よく「自立」できた先に待ち受けている社会と他者の姿が十分に魅力的でないかぎり、誰しも自ら進んでステップを踏み出そうとはしないだろう。「若者」たちにとって、仕事を介して関わる社会が荒んだものに映るかぎり、彼ら／彼女らは「働くこと」に積極的な意義を見出し得ないだろう。人びとがともに暮らす社会のあり方自体を、もっと豊かで魅力的なものにすること。それは、幸いにもホームレス状態に陥っていない私たち一人ひとりに課された責任であるに違いない。

